

会 議 録

会議の名称		令和元年度(2019年度)第1回つくば市総合教育会議	
開催日時		令和元年5月20日(月)15時30分から17時30分まで	
開催場所		つくば市役所5階 庁議室	
事務局(担当課)		総務部総務課	
出席者	委員	五十嵐市長、門脇教育長、鈴木教育委員、小野村教育委員、柳瀬教育委員	
	PTA 代表者 (つくば市 PTA 連絡協議会)	根本会長(高山中学校)、付副会長(並木中学校)、森田副会長(春日学園義務教育学校)、二宮副会長(荃崎第三小学校)、長橋副会長(今鹿島小学校)	
	事務局	《総務部》藤後部長 《総務課》中泉課長、中村課長補佐、澤頭係長、東泉主査、鈴木主任 《教育局》森田局長、大久保次長 《教育総務課》貝塚課長、吉沼課長補佐、宇津野係長、青木係長 《教育指導課》朝賀課長	
公開・非公開の別		<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開	傍聴者数 10 名
非公開の場合はその理由		—	
議題			
会	1	開会	
議	2	市長挨拶	
次	3	内容 教育大綱策定に向けたPTA代表者との意見交換	
第	4	閉会	

<審議内容>

事務局：それでは、ただいまから、令和元年度第1回つくば市総合教育会議を開催いたします。本日はお忙しいところ、御出席いただきましてありがとうございます。本日の会議でございますが、前年度同様、つくば市附属機関の会議及び懇談会等の公開に関する条例第3条に基づき、公開で進めてまいります。開催に当たり、市長の五十嵐から挨拶申し上げます。

市長：皆様お集まりいただきまして、ありがとうございます。今日はPTAの代表者の皆様に来ていただきました。これまで総合教育会議では、一般的には有識者と呼ばれる方々、例えば軽井沢でインターナショナルスクールを展開して非常に注目されている小林りんさんやリクルートの総合教育研究所でスタディサプリの開発をされた小宮山さんに世界のICT教育等の事情をお話ししていただきました。また、長野に日本で初めてオープンしたイエナプランスクールの開設に携わっている方にお話をいただく等を行ってきました。一方、それだけではやはり現場感のないものになってしまうだろうということで、校長先生との意見交換も数回行ってきました。そこでは、非常に歯にきぬ着せぬ意見が出され、激しい議論がされたわけですが、それでいいと思っています。教育は皆さん思いがあるだけにヒートアップしがちですが、「教育は何のために我々やっているんだろう」、「一体どういうものなのだろう」ということを根本から問うような総合教育会議でなければ行く意味がないだろうと思っています。きれいごとだけを並べるような会議ではなく、本音で現場の声を聞くことと、現場が全てだから現場の先生がやりやすいようにするというだけではいけないわけで、私どもは先生方を全力でサポートを当然していく環境を整えますけれども、同時に教育のあるべき姿も追い求めなくてはならないという狭間で、いろいろな議論をしています。そういう中で、もう一翼の大きな存在として、PTAあるいは保護者という存

在があると思っています。今日は、市の P T A 連絡協議会の会長、副会長の皆様にお越しをいただきました。現場で日頃から先生とおつき合いをされていて感じる事、学校行事等で感じる事、御自身やあるいは周りのお子さんと接していて感じている思い等もあると思いますので、形式ばった話はせずに、日頃感じている事をお話しただいて、それを大綱の中に反映させていきたいと考えています。今回は、骨子案とは呼んでいますが、たたき台のたたき台です。私ももっと言いたいことはありますけれども、一旦、今までの全部の議論を事務局としてまとめて出した案ですので、ここからさまざまに形で進化していくと思いますし、視点として薄い部分あるいは足りない部分等もあると思います。そういった事を議論するバージョン 0.2 程度と思っただいて、たたき台として議論をしていただければと思います。ちょっと長時間になると思いますが、是非活発な御議論をよろしく願います。

事務局：協議に先立ちまして、本日の会議に出席されている方々の紹介をさせていただきます。まず、総合教育会議委員を紹介いたします。

〔総合教育会議委員紹介〕

事務局：続きまして、P T A 代表者の皆様を御紹介させていただきます。

〔P T A 代表者紹介〕

事務局：なお、事前に御郵送した P T A 代表者参加者一覧の資料について、会長の根本様の御名前に一部誤りがございました。大変申し訳ございませんでした。皆様のお手元には修正した資料を配付しております。続いて、教育局の職員紹介を教育局長からお願いいたします。

〔教育局職員紹介〕

事務局：続いて、事務局の職員紹介を総務部長から行います。

〔総務部総務課職員紹介〕

事務局：本日の会議ですが、お手元の次第に従って 17 時 15 分までを予定して

おります。今回の内容は、教育大綱策定に向けたPTA代表者との意見交換となっております。限られたお時間ではありますが、よろしく願いいたします。それでは、次第の「3 内容」に移らせていただきます。以降の議事進行は五十嵐市長をお願いいたします。

市長：先ほども申し上げましたが、昨年は8回会議を開催しました。おそらく教育大綱を作るために総合教育会議をこんなに行っているところはないのではないかと思います。いろいろな情報収集や意見交換をしましたが、やはりもっときちんと議論をしていきたいということで、当初は今年度の秋ぐらいには大綱を作ろうと話をしていたんですけれども、議論を深めて行ってパブコメでいろいろな意見をいただくというようなこともありまして、これは急いでつくっても意味がないことですので、しっかり議論をするために年度末に完成を目指していきたいというような思いで、今回も開催させていただきます。本題に入る前に、これまでの議論を集約して大綱をどうまとめていくかというイメージの骨子案を、事務局が事前にお送りしていると思います。繰り返しになりますが、今後ブラッシュアップをしていきたいと思います。私も後で言いたいことを言おうと思っていますけれども、たたき台として御覧いただくとして、事務局から説明をお願いします。

事務局：それでは、事務局から説明させていただきます。着座で失礼いたします。本資料については、先ほど市長からの説明にもありましたとおり、これまでの議論を集約して大綱をどのようにまとめていくか、イメージを共有するための資料となっております。最終的な大綱作成に向けて、まとめ方や文言等については、今後改めて御議論いただく形となっております。あくまでも本日時点のたたき台として、案の一つとして御理解いただければと思います。それでは、1枚目のつくば市教育大綱イメージを御覧ください。この図は、これまでの総合教育会議で発言や議論になったキーワードを類型化し、五つの柱で表現しております。この柱が、つくばならではの世界のあした

見える教育を支えるイメージを表現しています。柱の中身としては、一つ目の柱は「子どもに関すること」、二つ目の柱は「教師に関すること」、三つ目は「地域に関すること」、四つ目は「学校、学習環境に関すること」、五つ目は「教育の機会に関すること」をまとめています。なお、教育大綱については、地方教育行政の組織及び運営に関する法律において国が定める教育振興基本計画を参酌し、地域の実情に応じて策定することとしています。今回まとめた五つの柱についても、これまでの議論をまとめあげた形ですが、結果として国の教育振興基本計画とも合致しておりますので、大きな方向性としては問題ないと考えております。それでは、それぞれの柱について御説明いたします。基本的な構成としては、各大項目、それと柱のタイトルについて三つずつ小項目を設けています。一つ目の柱のタイトルとしては「子どもが幸せな人生を送る力を養う」としています。三つの小項目としては、社会力や自己肯定感、多様性を認めること、ケーパビリティなどを表しています。二つ目の柱のタイトルとしては、「教師の教育力を向上させる」としています。三つの小項目としては、教師自身の魅力を高めることや教師の指導力や組織力の向上、過重労働への対策、本業である授業に集中できる環境づくりなどをあらわしています。三つ目の柱のタイトルとしては「地域ぐるみで子どもを支える」としています。三つの小項目としては、家庭、地域、学校、それぞれの役割の相互理解や連携を強化すること、地域に向けた情報発信などをあらわしております。四つ目の柱のタイトルとしては「多様な学びを支える学習環境を向上させる」としています。三つの小項目としては、学校や学び方に多様な選択肢を持たせること、学校施設の整備などをあらわしています。五つ目の柱のタイトルとしては「つくばならではの多様な教育機会を創出する」としています。三つの小項目としては、SDGsの考え方に基づいた多様な教育環境の整備、科学技術や文化芸術との交流、生涯学習の環境整備などを表しています。これらの五つの柱をもとに、教育大綱の骨子案、た

様式第1号

たき台についても作成しました。2枚目以降のつくば市教育大綱骨子案を御覧ください。大きな方向性として、基本理念を初めに示しています。基本理念としては「世界のあしたをつくる人間を目指して」として、三つの人間像を示しています。一つ目は、「自ら周りに働きかけ、変革を起こしていける人間」ということで、これは昨年度の第1回総合教育会議で五十嵐市長から皆さんに問いかけたとおり、これからの子どもたちに望む人物像を表現しています。二つ目、三つ目については、門脇教育長が提唱する社会力を持つ人間像を表現しています。以下の世界のあしたが見える教育を支える五つの柱については、先ほど大綱イメージでお伝えした大項目と小項目に加え、小項目の説明を文書で示しております。以上、簡単でございますが、大綱のイメージと骨子案についての御説明を終わらせていただきます。

市長：ありがとうございました。今、五つの柱にまとめてみたということで、別に、これが今後三つになるかもしれませんし、10個になるかもしれません。そういったことも含めて、まだこれからの話です。この中で特に、今日はPTA関係者の皆さんがいらしてくださっていますので、意見交換をしたい部分としては、やはり三つ目の柱の「地域ぐるみで子どもを支える」というところが、今後の教育あるいは世界のあしたが見える教育というのは、とりわけPTAの皆さんとどういう関係を目指していくのかということになるのかと思っています。その部分を中心に意見をいただきたいとは思いますが、それ以外の部分でも結構です。ちょっと時間を見ながらではあるとは思いますが、本当に自由に言い散らかしていただいて結構ですので、まとめるのはこちら側の仕事として、責任持って要旨を捉えてまとめたいと思いますので、いかようにも御発言をいただきたいと思います。いきなりそう言われても難しいかもしれませんが、根本さん、この教育大綱を御覧になっていただいていかがですか。

根本会長：骨子案を見た時に、まとまっていて言葉尻は素敵だなというところ

で、そうすると最終的な「世界のあしたが見える教育」というところなんです。具体的には現場として、地域の中で私たちができることは何かというところでちょっとだけお話させていただくと、現場で先生がちょっと疲弊しているというのはいつも感じています。というのは、やっぱりなかなか本音を子どもたちにお伝えできないというか、多分皆さんの学校でもそうだと思うのですが、私は今、島名小学校と高山中学校に属していますが、人数が増えておまして、まず駐車場が全然ないということで、否定的なことをお伝えするのに、どうやって要は学校を守るか、先生を守るかというところを常に現場では感じております。今、特に思うのが、一部の声を拾うことによって、大多数のやりたいことがなかなかできないというのが現状というところがあります。その中でもやはり一番は先生たちを、発言力も含めてしっかりPTAが支えなくてはいけないというのは常に感じております。その中で、先生たちの業務が多々ありますので、電話が来たらやっぱり対応せざるを得ないというところがあるので、前回、市長からお話をいただいたような午後5時以降の留守番電話の問題などがあります。これはブレインストーミングみたいな感じでいいですかね。

市長：そんな感じですか。ちょっと伺っていいですか。先生たちが、子どもというより保護者の方を見ながら動かざるを得ないような状況があるとお感じということですが、どんな場面で、そういう印象をお持ちになりましたか。もうさばけたところで、今、学校で何が起きているのか。

根本会長：さばけたところで言いますと、やはり一部の保護者の言葉というか、子供に対しての電話が校長にあると、ここでは、どちらかというとは今は小学校の問題の方が多いのですが、やっぱり人数が増えることによって今までできたことができなくなったりとか、昔の伝統というか、今までできた当たり前のようにならなくなったことが変わってきたりというのが多々ありまして。

市長：そういう電話がかかってくるというような状況で、先生が疲弊しちゃう。

様式第1号

根本会長：はい。その中に、やはり子どもたちにはもちろんですけども、父兄に対しても案内がきちんと伝わっていないとか、そういった感じで、なかなか個別的にはちょっと控えさせていただきますが。

市長：分かりました。では、一言ずつ、全体感も含めて、この教育大綱全体を見てお感じになったところをまず伺っていきたいと思います。では、付さんお願いします。

付副会長：並木中学校のPTA会長、付と申します。お世話になります。先ほど根本さんのお話の中で、電話一本で、先生たちがそれを真剣に対応して下さることによっていろいろ変わっていくということは、私も感じたことがあります。それは正に、この軸というか柱といったものがないからこそ、そういうふうになっているんじゃないのかなと思っています。この骨組みを早めに公表し、先生たちが目標となる軸となるものがあつたらいいと思っております。教師の教育力の問題もあると思います。小学校でも今は男の子も女の子も先生が呼ぶとき「さん」づけになっているから、随分と人権は浸透してきたと思いますが、やはり現場の中で、先生は免許を更新する際とか、やっぱり多少、本当に大事な部分が少し勉強不足かなと感じるところがあります。さらに3番目の地域ぐるみの家庭、地域、学校の連携の強化の中にある家庭の部分なんですね。「宿題を多めにしてください」という保護者の声があると、本当にその学年が多くなったりするので、「子どもが宿題をやりたくないときにどうしたらよいのか」ということがあります。やはりいろいろな保護者がいる中で、ちょっと雑談の中でも、家庭教育に関しては、今、連絡網のない中で親同士の交流が非常に少ないんですね。その中で、多分共通している悩みはたくさんあると思います。例えば、親は子の鏡、親が変われば子が変わるという、いろいろなきれいな言葉がありますが、じゃあ、今日うちの子が宿題をやらなくて、私はどういうふうに対応したらいいかという具体的なことになると非常に悩ましいことですよね。私自身も、本を読んだり、

テレビを見たりして勉強していくんですけども、その中で保護者同士は集まる機会じゃなくても、何らかの形で事例研究というか、お互い学び合っていけたら、もっと家庭の幸せが増え、学校でも先生たちはちょっとやりやすくなるんじゃないのかなと思うんです。年に数回、市主催の家庭教育の講演会とかもありますし、出席もうちょっと増えたり、結果をもうちょっと親御さんに知らせたりとか報告したりした方がいいのではないかというふうに、広めていけるということです。前向きで、親も、生まれたから、学校に行かせたから、もう安心というのじゃなくて、常に学習し続けなきゃいけないと実感しています。

市長：ありがとうございます。今、教師の人間力と保護者も力をつけていくということだと思います。お話にあったように、教育力の前に人間力という話は、門脇教育長も教師こそ社会力をつけなくてはいけないというお話をしていることにもつながると思います。では、森田さん、お願いします。

森田副会長：春日学園の森田です。大綱の骨子案についてということだったので、まず、そちらのお話をさせていただきたいと思います。これは事前に送られてきた資料をぱっと目を通して、なかなかいいきれいなことが書いてあると思う一方で、正直言ってちょっとわかりづらいという部分もあったので、今日説明していただいて、イメージに関して、この5本の柱については、子ども、教師、地域、学校、機会という5本の柱で書いたということが今わかりました。ぱっと見ると、4番にも「多様な学びを」と書いてあったり、5番にも「多様な教育機会を」と書いてあったりしたので、これ同じようなことを書いてあるのに中身違うし、どういう作りなのかなというのは、ちょっとぱっと見、正直分からなかったところがあったので、説明していただいてわかったという感じです。ちょっと細かい話になってしまうんですけども、1番から書いてある中身とか、こういう細かい話はいいですか。

市長：是非お願いします。もう全部、率直に。

森田副会長：思ったことを一通り、細かいことも含めて、送られた資料に基づいてお話しします。1番の「子どもが幸せな人生を送る力を養う」と書いたところ、①番目ですね。「よい人間関係を作り、よりよい社会を作る意欲、構想力、実行力を持つ」と。ぱっと見ると、何となく分かるんですけども、よい人間関係をつくり、それが意欲、構想力、実行力を持つというところが、下を見ると何となくわかるんですけども、これだけ見てしまうと、ちょっと人間関係をつくるのが社会をつくる意欲、構想力、実行力、ちょっと分かりづらいなというふうに思いました。「自己肯定感を育成し」というところに関して、これも「他者と互いに多様性を認め合う力を養う」というのも、ちょっと何か互いに多様性を認め合うって、ちょっと違和感を持ちました。認め合う力を養うといったら、もう本人の問題なので、互いに認め合う力を養うって、言葉としてちょっと分かりづらいなというふうに思いましたというところであるとか、次もそうなんですよね。「よき自己実現ができ、幸せな人生を送る力を養う」と読んだときに、幸せな人生を送る力を養うというのは、おそらく将来の幸せな人生なんだろうけれども、よき自己実現をするのも将来なのかな、これ、学校時代によき自己実現をすることによって幸せな人生を送る力を養うということを言っているのかなというのがわからなかったです。この前後の文章のつながりが、もう三つともちょっとよくわからなかったなというのが感じました。説明を聞いて、2番目のところですね。2番目の「教師の教育力を向上させる」というところの②ですね。「教職員全員が一丸となり、通いたくなる学校を作る」という文章も、これは教師に関することを書いている項目という説明を受けたので、後半も教師が通いたくなる学校を作るということを言っているのかなと思ったんですけども、そういうことなんですかね。そこも何か通いたくなる学校と言われると、ぱっと見れば、やっぱり子どもが通いたくなる学校をつくるために教師が一丸となるのかなとか、ちょっと分かりにくかったなと思いました。何か細かいことばか

り言ってしまっ。

市長：そういうことも含めて是非御意見をお願いします。

森田副会長：3番目ですね。「教職員の過剰な負担を軽減し、充実した授業を行える環境を整える」と。これ、私たちは、この前、市長からもお話あったとおりに、働き方改革が喫緊の課題であるということを伺っているので言いたいことは非常にわかるんですけども、過剰な負担を軽減した上で充実した授業を行えると、文章としてはちょっと矛盾していると感じたので、皆さんに分かっていただけるかどうかのかなのかなと思いました。3番は、特に難しいことはないのですが非常に分かりやすいのかなと思いました。4番は、さっき言ったとおりですね。4番、5番は、これ、ちょっとどういうことを指しているのかよく分からなかったまま読んでしまったので、4番、5番、ごちゃごちゃだなというふうに思ったんですけども、4番が学校環境、5番が機会ということを手前に入れると多少は分かるのかなとは思いますが。4番の①番、「学びの変革に向けた多様で質の高い教育環境を」、何か変革に向けというところも僕自身はいまいち変革に向けた多様で質の高い教育環境というのがちょっとよくわからなかったなと思いました。ここに書いてある下の文章も、「多様な学び方を選択できる教育環境を創出していきます」ということを書かれているんですけども、これもちょっと選択できる教育環境をというのは、これは後々説明していただければいいのかなと思うんですけども、学校を選択できるのか、何かいろいろとこういう選択できることが増えていくのか、どういうことをイメージされているのかなというのがちょっとよくわからなかったなというところです。これは後々出てくるんだと思いますけれども。あとは5番ですね。5番の①の下文章ですね。「誰ひとり取り残されないSDGsの考え方のもと、家庭の貧富の差や障害の有無、公立、私立の違いや個人の学習進度の違い等に関係なく、既成の枠組みにとらわれない教育環境の整備を進めていきます」、これ、意味がちょっとわからなかったですね。

関係なく、何だろう、学習進度の違いに関係なく、関係ないような教育環境をつくっていくという意味なんですかね。僕の語学力がなかなかちょっと、この関係なくがどこにかかってくるのかというのがよく分からなかったなというところが気になりました。細かいことばかりで申しわけないんですけども、全体的にぱっと見て、いいことが書いてあるんだろうなと思いつつ、ちょっと文章が分かりづらかったところだけ、まずは指摘させていただきま

市長：ありがとうございます。どうでしょう、今の疑問点って、今、それぞれ質問ありましたけれどもまとめた意図は答えられますか。こういう議論をこういうふうにまとめて、こういうふうに書きましたというのがあるとは思いますが、難しくれば後でもいいんですけども。

森田副会長：非常に細かいので、また別の場所でお話しさせていただいても。

市長：別の場所にしますか。私もいろいろ気になっていたことと重複してしましたし、どんな表現にするにしても伝えたいことが何かというのがそもそもわからないとしようがないので、文言についてはいろいろ大幅に書き直すことにはなると思っています。通いたくなるのは、きっと子どもじゃないかと僕は思ったんですがそういうことですか。あと、何にかかるとかいうことも明示していく必要があるのかなと思いますし、これをそのままという話ではないと思います。たくさん見ていただいて、ありがとうございました。では、二宮さん、よろしいですか。

二宮副会長：荃崎第三小学校でPTA会長をしています二宮です。よろしくお願ひします。荃崎地区は、児童が少ないというのが基本的にありまして、その中で3番の「地域ぐるみで子どもを支える」という部分では、地区としては安泰していますね。学校も周りの地域の皆さんも保護者も、これは協力してもらっているんで、こういう部分はすごく助かっているんですけども、この5番の「つくばならではの多様な教育機会を創出する」という部分で、

さっきおっしゃった誰ひとり取り残さないという項目のところで、子どもたちが、やっぱりいろいろな子どもがいると思うんです。不登校の子とか、学校行っても保健室で登校するという子どもたちがいると思うんですけれども、そういう子どもたちにもどういう対応をして、その取り残さないというふうに考えていってもらえるのかというのが、そこは具体的に方向性を示してもらえるとありがたいかなと思います。あと、荃崎中学校全体で、今、部活に関して外部コーチが入っているという形になっていると思うんですけれども、文化・スポーツクラブの取り組みとかはどう考えているのかなと思っています。あと、部活のほうなんですけれども、教師の働き方改革のやつで時間が短くなっているんですけれども、それに対して、部活に対する熟練度がちょっと下がっちゃっているんじゃないかなというふうにあるのと、あと個人的な意見なんですけれども、部活で、例えばバレー部に入りたいって、バレー部が例えば10人いるとするじゃないですか。試合に出ます、試合は6人しか出られないんですね。6人の中で固定メンバーしか例えば試合に出られない、ずっと6人で試合をやっている、残りの4人はどうするんだと、何しにバレー部に入ったのかと、試合をして経験をするために入っているんじゃないのかというふうに自分は思うんです。そういう先生1人の考え方、例えば、もう君たちレギュラーだからずっと固定でやるからねという、その先生1人の判断で、本当にやりたい子どもたちが試合にも出られない、経験もできないというのが、自分も1回試合を見たことがあって、それを感じたので、どうなのかなということ、やっぱり教師と教育力を向上させるという部分、子どももやっぱり成長する過程にあると思うので、そういう経験をさせるように教育もしていただかないといけないのかなと考えています。あとは、特にないです。

市長：ありがとうございました。不登校の部分であるとか、本当に重要な部分で、選択肢として学校ってどういう場所なんだろうということをやっぱり、

これ実は最初の問いに、学校って何だろうみたいな話をしていたわけなんですけれども、そういうことで、多分私が思っているのは、今までは多分学校に行くということは、きっと客観的に幸福を与える、幸福な人生を送ることにつながるみたいな前提があったのではないかと思うんですけれども、多分そこから我々は疑わなくてはいけないと思っています。学校に通うということも一つの選択肢のうちの一つで、幸せな人生を送るためにはきっといろいろな選択肢があるはずで、それを選びやすくしていくことがつくば市ではやらなくちゃいけないということは、今の段階では思っています。部活について何のために部活をやるのかという今の問題提起は非常に重要だと思っています。必ずしも統一されていないし、学校で何のために部活やるのかと言われていないと思います。子どもたちも何のために部活やるのかと考えていないのではないかと思います。先生によって、試合を勝ちに行く先生もいれば、みんなを出場させる先生もいれば、関与しない先生もいれば、それぞれだと思います。そういう状況は、きっと誰も幸せにしていないというようなことがあると思うんですけれども、教育局長、文科省は、部活動というのは何の場所であり、何のための部活かというのは明確に定義していますか。

教育局長：教育課程外ではあるというのが、まず一つあります。それから、この前、部活動の働き方改革も含めて、部活動の意義、改革をしようという案を出した時に、部活動の意義というのは、改めてそこで話していて、同じ者が同じ目的を持って一緒にやることによってお互いに成長していくという部分言われていたところだとは思いますが、それが実際の指導の仕方として統一されているかということ、そこは若干弱いんじゃないかと思っています。ですから、学校で今大事なことを、何でも日常的にやっていることがなぜやられているのか、どうしてやられているのかということ、改めてみんなで考えることは大事だというのは、この前も校長先生方には話したところなんです。

市長：ありがとうございます。では、長橋さん、お願いします。

長橋副会長：今鹿島小学校でPTA会長をやらせていただいております長橋と申します。よろしく申し上げます。項目ごとに意見を述べさせていただきますと、1番のところがよく分からないんですけど、「教師の教育力を向上させる」ということなんですが、今鹿島小学校、新任の先生が来ることが多いです。あと、豊里中学もそういう先生が多い中で、先生がどのように育っていくかというのは、その先生自身の能力に任されているような気がします。そのサポート体制がちゃんととられていないように我々は感じています。学校はそうは言っていないんですけども、ちゃんとサポートをしていますとかということは言っているんですが。あとは、教師という仕事が、このPTAの仕事をするまでは、教える仕事だと思っていました。本当に勉強を教えるのが教師の仕事だというふう感じていたんですけど、PTAの運営をやっていくと、教師は事務屋さんであるというふうにごく感じています。これは、完全にもう学校というものがおかしくなっているというふう感じております。先生は事務屋さんであるのかもしれないですが、やはり子どもを教える先生でなければいけないというふうに思います。なので、ここにも書いてあるんですけども、書いてありましたっけ、「過剰な負担を軽減し、充実した授業を行える環境を整える」、これはすごくいいことなので、ぜひそうなるように改善を図っていただきたいと思っています。3番目の地域ぐるみですけども、私がいるところは北西支部といって、つくばの北、西、いわゆる田舎というところにおります。事実のほうを申しますと、今鹿島もやっぱりお祭りがあって、大分、子どもが一生懸命やっているところもあるんですけども、私が六、七年前に今鹿島に来たときは、小学校の人数が100人ちょっとで、今は180人に増えています。大分増えてきていて、増えているのは地元の子どもの数が増えているわけではなくて、やはり外から入ってきている子どもが増えてきているというところだと思います。そういったところで、子ども会と地元がうまくつながらない、まさに自分がいるところの子どもた

ちもそうなんですけれども、同じ学校から見ると地区なんです、子ども会に入っている家庭と入っていない家庭が出てきてしまっているということで、この地域ぐるみというところがなかなか難しいんじゃないかなというふうに感じています。つくばは、ほかもそうだと思うので、そのあたりはどのようにお考えなのかという疑問をちょっと持ちました。それから、4番の「多様な学び」ですが、ここを非常に危惧しております、すごくいいことを書いてあるように見えるんですが、学校の規模や学習方法など、学校ごとに特徴を持たせていくと書いてあるんですけれども、昨年、要望書を提出したときにも私は申し上げましたが、学校、今鹿島小学校と中学校、大型テレビが市で買われていない。あと、タブレットやパソコンの数が足りないということも申し上げました。実際、今年度、足りていません。全員の子どもに行き渡らないクラスがもう出てきてしまっています。これはもう子どものためにはならないと思います。再三、昨年申し上げたのに、このような状況が起きてしまって非常に残念だと思っているんですが、それをこの文書に当てはめると、都市部の学校にはお金をかけるけれども、田舎の学校にはお金かけないと、ちょっと言い方は悪いんですけれども、そういうふうにも読めてしまうので、このあたりしっかりと考えていただきたいなと思っています。あと、つくばならではの多様な教育機会ということなんです、今、県立の学校、すごい動きを見せています。中高一貫もしくは併設の学校が増えてきているということで、県主導でどんどん動いているんですけれども、我々保護者の間の話では、「つくばには行ける高校がないよね」という声が非常に多い。小中を一生懸命頑張っていたくのはいいんですけれども、やはりその後、高校に行く、大学に行く、就職するというので、おそらく市の考えは、小中、そして就職のあたりがこういう感じで盛り込まれていると思うんですが、高校、大学というところが抜けているんじゃないかなと思っています。学校をつくれということではないんですが、近くの学校は非常にレベルが高い、遠

くの学校はそうでもない。すごい意思を持った子は、その学校でも個性を出し、伸びていくという話は聞いているんですけども、と考えると、本当にレベルの高い高校があつて、中くらいの間層の学校がないというところで、保護者もみんな、ないよねという話をしています。そのあたりをどうお考えなのかなというところが疑問で思っています。私からは以上です。

市長：ありがとうございました。今鹿島小の現状については、私どもも認識をしておりますし、もちろん教育局としても、できる限り、きちんと手厚くサポートをこまめに子どもたちの状態をケアしながら、先生たちもとは思っていますが、おそらくまだ足りていない部分あると思いますので、会長さんとして、「ここがこうなんだよ」というのをピンポイントで教育局におっしゃっていただくこともぜひお願いしたいと思いますが、そこはもう御遠慮なく、我々は皆さんとパートナーとしてやっていきたいと思っておりますので、是非お願いします。新任の先生について、どうしても学校は何か言われると、「やっています」と言いたくなっちゃうんですけども、そうではないのだと思います。ほとんど自動的に反応するようになってしまっているのも、きっと保護者と先生の関係というのが、長い時間をかけて、ある意味、向き合わなくちゃいけないような関係になってしまったからだと思うので、むしろ先生たちが保護者に、「ちょっと今この辺で困っているんです」とか、「こんなことができないんですよね」というような関係性になってしまうように、先生たちの頭の中もやっぱり変わっていかないとはいけませんし、地域ぐるみというのはきっとそういうことなんじゃないかと私は思っています。

長橋副会長：すみません。先生から保護者へという非常にいい言葉を聞けたと思ったんですが、実際は、先生は保護者に泣かされています。我々の今鹿島小学校では保護者に泣かされているという状況があるので、恐らく先生は保護者になかなか言えないんじゃないかなというのが現状だと思います。私、PTA会長をやっているんですが、会長には何も上がってこないのに、アン

テナが低いと言われたら、もうお叱りを受けるとおりなんですけれども、上がってこないで、そういう現状をわからない、なので校長先生とお話ししたりしていろいろ現状を聞いているんですけれども、実際は保護者に泣かされているという現状があるので、それは地域の問題かもしれないんですけれども、そのあたりもしっかりやっていると、先生はもう何も言えなくなっちゃうんじゃないかなというところは感じています。私は学校を守るほうだと思っています。なので、この前、総会では、そのあたりを強調して挨拶させていただいたんですけれども、PTAがもう学校を守らないと今、現状だめだよということをもう保護者には説明して、学校を守る方向に私は動いておりますが、なかなか、やっぱり言っているからだと思うんですが、僕のほうには入ってこないというのが現状で、そのジレンマの中で今戦っているような状況です。

市長：ありがとうございます。そういうふうにご考えてくださることは、すごくありがたいです。ちょっと個別にいただいた部分で私が言える部分だけちょっとお答えしたいと思いますが、別に私が質問に答える場所ではないんですけれども、県立の高校、本当に私のところにも鬼のように要望が来ます。やっぱり普通の子どもたち、普通の子どもというのは学力的に中間クラスの子どもたちが行く場所がないというのは、土浦には県立高校がたくさんあって行きやすいというような状況がある中で、ますます中高一貫を県が進めていくという方向性が打ち出されていますので、一体どういう影響が出るか、果たして、その小中一貫というものをどう捉えていくんだというのは、もう本当に議論を今もしているところではあります。つくば市でも小中一貫のメリットとデメリットについては先日報告をまとめてもらったところですが、県知事に対しての要望として、私いつも、たくさん要望を出すんですけれども、優先項目の中の数少ない優先項目の一つに、何とか県立高校をつくばに作ってほしいというのは入れてはありますが、なかなか県も余り乗り気では

ないような状況です。タブレット、電子黒板等については申し訳なく思っています。今、大きく取り組んでいることとしては、まず、（電子黒板について）今年の予算で全中学校の普通教室に配備できるように予算は確保しました。小学校のクラスについては、電子黒板と、あと今はプロジェクターが非常に活用のパターンが広がってきているので、そのどちらがいいかというのを検証するために、両方の予算をつけて実験というか検証をして、学校で実験をするというところすごく怒られちゃうんですけども、検証をして、それをもとに、どういう形の整備が一番、先生たちにとっても使いやすいのというようなことを確認をして整備を進めていきたいなというふうに思っておりますので、決してこの辺の学校にだけお金を使おうと思っっているわけではないんですが、どうしても新しい学校ですと何かそういうふうに見えてしまうんですが、そのあたりちょっと御理解をいただければと思います。地域ぐるみという部分が、本当にどうすればいいかというのは、正直、私もこの問題について答えを見出せていないんですね。新しく来た人と前からいる人たちがどうつながっていったって、少しずつそういう事例が出てきたり、周辺市街地の勉強会というのを今やっていますけれども、そういう中でも、前から住んでいた人と新しい人が組み合わさっていろいろな意見を言い合う流れが少しずつ出てきていますが、なかなかやっぱり子ども会も、今度、役員の負担が多いとかいろいろあって入っていなかったりとか、そんな課題がある中で、ちょっと何をしていけば、このあたりのつながりがもっとできていくのかというのは、まさに、今日皆さんにも伺いたいところでもあります。先生がもう事務屋になっているというのは、我々は本当に真摯に受けとめて、これをとにかく改善したいと思っておりますので、是非、今後もいろいろな保護者に向けての啓発というのを一緒にやっていければと思いますので、今、大久保次長をリーダーに働き方改革のプロジェクトチームが立ち上がるところです。

教育局次長：今月下旬に立ち上げます。

市長：今月下旬に第1回ということで立ち上がりますので、10月を目途にすぐできることとちょっと時間かかるところもあると思いますが、やっていきたいと思いますので、是非お願いをしたいと思います。ということで、一巡でいろいろ御意見を伺って、これこそ保護者の皆さんにしか言えない、あるいは、PTA会長というまた一保護者とは違う立場から見えるお立場で御発言いただいて大変ありがたかったんですが、教育委員の皆さん、今いただいた御意見等について感じられたことやより深く聞いてみたいところ、あるいは、こういうところ共感するなどどんな形でも結構ですので、今のPTA会長さんたちの御発言に対して小野村先生からコメントをいただいてもよろしいですか。

小野村委員：私も、市内の中学校で16年間教師をやってきました、その何年間かは大変荒れた学校も経験をしました。そのときのことをいろいろ思い出しながら、やっぱりPTAの皆さんに随分支えていただいたなと思いをいたしながらお話を伺っていました。

親同士の交流というお話もありました。それから、子ども会と地元が遊離しているとかいうお話もありました。そういった中で、やはり私の個人的な意見ですけれども、キーワードはやはり「地域ぐるみで支えていく」ことかと。

学校が本当に荒れたとき、もうどうしようもなくなってくるんですね、教師も。私も本当に毎日やめたいなと思っていました。学年主任をしていたときには、先生たちを励まして、残り何日だよとカウントしながら教室まで行こうとって、何人かの先生の背中押しながら教室まで行ったようなことがありました。ただ、そのときにやはり力になったのは、地域の皆さんのちょっとした声がけだったかなと思っています。

そういう問題を解決するにしても、親御さんの中でも、やっぱり今、孤独な子育てというような方も多いと思うんですけれども、そういった問題を解

決するためにも、先ほど二宮さんからありましたが、私は一つの解決のキーワードになるのが、いわゆる文化・スポーツクラブと言えるようなものではないかなというふうに思って、ずっと以前から主張をしているところです。そこでは、例えば子どもたちも、先ほどは運動能力の違いとかというお話もありましたけれども、プロになりたい子が一生懸命やるような部活動であってもいいかもしれないし、ちょっと楽しみたいというような子のための部活動であってもいいかもしれないという選択肢もつくれると思います。それから私がイメージしているのは、やはり例えば親御さんも外から転入してきたときには、なかなか地域に入っていけないというところがあると思うんですね。そこに、地域のクラブですから、例えばお子さんもバレーボールやっているけれども、お母さんも一緒にバレーボールをやっているとか、そういうところから交流のきっかけになるといいのではないかなというように思っています。この週末、旧筑波東中学校で、ママさんブラスバンドの演奏をちょっと聞いてきたんですけれども、私も家庭教育学級でいろいろお話しさせていただきますけれども、なまじ家庭教育学級をやっているよりも、ママさんブラスをやっていたほうがよっぽど効果があるんじゃないかと思って、すばらしい活動だなと思って見ていましたが、そういったものが地域に根づいていくといいのかなと思います。

もう一つ、2番と3番にかかわってですが、これも私が前から主張していることですが、例えば、先ほど不登校ということのお話もありましたが、不登校について研修をするときに、教師が教師だけで研修をしてもプラスにはならないと私は思っているんですね。だから、そういうときに、保護者の方と教師も一緒に研修をする、一緒に話し合うような場があると、そこでまた共通理解の機会もなりますし、ある意味、学校の先生って、大学を出てそのまま学校に入った方って、最も視野が狭いんだと思うんです。実際この間、イエナプランではなかったと思うんですが、どこかのオルタナティブ教育に

ついて語るときに、その方もがおっしゃっていたのが、デンマークの方だったかな、ちょっと忘れてしまいましたが、教師というのは、ある意味とてもすぐれた方々なんだが、最も視野が狭いという前提で教員研修をやっていますというようなお話があったんですね。それで、地域の中でみんなと、だから社会でいろいろな経験をしているPTAの方と、日本でいうところのPTAの方なんかと一緒に学ぶ機会を大切にしていますというようなお話をされていて、これはすごく大事な発想かなというように思いました。今後、もちろん教育委員会主催の研修も大事なんですけど、地域の中で一緒に学ぶ機会というのも創出していったらどうかというふうに思いました。

市長：ありがとうございます。ドイツなどがよくモデルにされますけれども、地域の総合型スポーツクラブという、学校教育ではなくて、地域において大人もプロになりたい子も、体を動かしたいというレベルの子もいろいろな人を受け入れるような素地があるというようなものが、常々お手本になると思っています。実は今、つくば市のスポーツ振興担当理事をお願いしている萩原理事は、もともと筑波大のサッカー部の監督までやられた方で、体育センター長をなさったり、ドイツにも行かれていて、その知見が非常にあります。今まさに、どうやって地域の総合型のスポーツクラブというものを作り出していけるか、それを、つくば市ではスポーツ政策の中に位置づけていければと考えています。スポーツをスポーツとしてだけ見るんじゃなくて、やっぱりスポーツって、教育はもちろんですが、福祉であったり、広く言えば、まちづくりもいろいろな形でつながってくると思っていますので、そういうことも相談しているところではありますけど、考えていかなければならないと思っています。その先生の発想も非常に重要だと思っています。私は教師の仕事というのは、教えるというティーチングから、もう少しコーチ的な引き出していくものに変化していこうという話をいつもしています。我々がコーチとしてトレーニングを受ける際にまず言われるのが、コーチングの対

象をクライアントと呼ぶんですけれども、コーチはクライアントの最大の学習者であるということを教え込まれます。つまり、コーチはクライアントのことを知っていると思いついてはいけません。何かアドバイスをしたり、こうだと教えてあげるのではなく、そのクライアントの中にあるものを全く知らない状態でいろいろ聞いていく、だから相手のことを学んでいくというスタンスで関わるべきだというようなことを言うんですが、ちょっとそのデンマークかどこかの先生の発想というのは、そういうものと非常に近いのかなと思っていますし、我々もコーチングをするときに、何かわかったような感じでアドバイスなんかしちゃうと、もうそのコーチングセッションというのは全然うまくいかないんですね。表面的には何かいいアドバイスでしたみたいになるけれども、そんなものがコーチの目指すところではないなというようなことは、いつも私自身も感じているところではありますけれども、ちょっとそういうようなことも含めて、鈴木委員いかがですか。

鈴木委員：子どもが2人おりまして、上の子が高校1年で下の子が中学2年です。私も葛城小学校と春日学園と両方でPTAをやりましたので、皆さんと同じような経験をしていると思ってお話しさせていただきます。どんな意見が出るのかなと思って楽しみにしてきたんですけれども、楽しみもあるし、不安もあるし、そういう気持ちで来たんですけれども、すごく現場感のある話を聞いてよかったなと思っています。まず、付さんがおっしゃったように、教育にはやはり軸が必要だという話があったと思うんですけれども、そのためにも、つくば市でこの教育大綱を今、一生懸命作っていているところなので、子どもたちにとっても先生にとっても、もちろん保護者にとっても、これを見ると、つくば市の教育がどういうふうに進んでいくのかというのが明快にわかるものでなければいけないと思います。そういう意味でも、森田さんが指摘してくださったように、文の意味がわからない、言葉がどの単語にかかっているのかわからないというのは、致命的な欠陥だと私も思ってお

ります。私も森田さんと同じようなところに引っかかって読んでいたので、そこはぜひきちんと直していただきたいと思いました。次に、二宮さんがおっしゃっていただいた部活動って何のためにやっているのかとか、学校って学園祭を何のためにやるのか、学校のお祭りって何のためにやるのかって、余り誰も考えないことがあるんですね。私も葛城小学校のPTAのときに、お祭りの実行委員会をやったときに、地域に新しく入った保護者の立場でしたので、葛城まつりって何のためにやるんですかという質問をしたら、もうどん引きされた記憶があるんですけども、でも目的がわかっていないと、何をやっていいのか、どんなふうにやっていいのかわからないんですね。すごく大事なことだと思っていて、今、大分テレビや書物などでも話題の東京の麴町中学校の校長先生の取り組みが話題になっていると思いますけれども、子どもたちにどうして学園祭をやるのか、何の目的でやるのかというところから始めてもらって行事なんかもやっているらしいです。学園祭に限らず、部活動も、また、何のために制服を着るのかとか、何のために学校へ行くのかとか、目的がわからないとどうしていいかわからないということは学校の中にたくさん転がっていると思うんですけども、そこを一つ一つ考えていくことこそ教育だと私は思っているので、大事な指摘だなというふうに思いました。次に、長橋さんのおっしゃった新任の先生方が教師として成長していくためのサポート体制を充実させてほしいという指摘も、私も同じように思っています。先ほどありましたように、大学卒業してすぐに教える立場になって、先生自身も苦しむことが多々あるんだと思うんですね。先生自身が力をつけて成長していくことが、先生自身の喜びでもあるし、自信につながっていくことでもあるし、教師生活を充実させていくことだと思うので、その体制は是非充実させていきたいというふうに私も思いました。最後に、皆さんも触れていらっしやいましたけれども、PTAをどういうふうなつもりで、姿勢でやっているかというお話の中で、私もPTAをやっていたから

わかるんですけども、学校の事情とか先生の疲弊している状態を見ると、どうしても先生方のほうに寄ってってしまう部分もあると思うんですね。もちろん、それをサポートすることはとても大事なことですけれども、一方で、保護者も皆さん同じ方向を向いているわけではないので、いろいろな意見が出てくるのが普通の状態だと私は思っています。どうしても一部の保護者、ちょっと過激なことを言う保護者を悪者扱いしてしまう傾向に、私も含めてあると思うんですけども、そうではなくて、学校の先生を守る一方で、保護者がいろいろなことを言ってくる調整役にぜひPTAはなっていたきたいなというふうに私は思いました。あと最後に、保護者と学校の先生のコミュニケーションというのは、働き方改革のこともあって、だんだんと取りづらくなっていっていると思うんですね。17時以降は留守電にしましよいうなんていうことを推奨されていますし、大きな学校では、家庭訪問も場所だけを確認してお手紙を入れて帰ってしまう。そうすると、先生とちょっと立ち話をする、お話をしてみて、この先生、どんなお子さんいらっしゃるのかしら、どんなことが趣味なのかしら、何でもいいんですけども、コミュニケーションをとる時間がますます減っていっていると思うんですね。私は、大胆に働き方改革を進めなくちゃいけないこの時期であっても、そこだけは確保していかなければいけないと思っています。コミュニケーションは、面倒で手間がかかることです。保護者が必ず先生たちの意に添うように動いてくれるわけではなくて、話せば話すほど、意見を交わせば交わすほど面倒になることはあるけれども、やはりそこは時間を割いて、こんな時代ではありますけれども、そこだけはアナログで面と向かって話せる機会をつくっていききたいなというふうに思っています。

市長：ありがとうございます。これが今お話に出た麴町中の工藤校長は、宿題をやらない、クラス担任もなし、中間とか期末テストもしないなど、いろいろと非常に注目されていて、この本自体はすごくおもしろいものでした。

様式第1号

参考になることもすごくたくさんあるなと思いつつ、つくば市はもっと前からやっているぞという思いもあり、紹介ですが、竹園東小では昔からずっと通知表は発行していないんですよね。通知表を全く発行してないのはなぜかという、昭和51年の開校以来のもので、まだ桜村時代なんですけれども、文書として残っていて、これがまた非常によくまとめられている素晴らしいものなんですよ。ですので、我々つくば市は、こういうものがあります。想像するに、「何で通知表ってあるんだろうね」ということから始まり、それを突き詰めていくと、必要ないということになったんだと思います。その頃の先生がそういう教育の原点で、教育とは何かということが書いてあります。別に通知表ないからって楽をしようとしているわけではなく、逆に、先生たちと保護者が面談をして、もっと点数でつけるんじゃないくて、その中身について共有して話し合おうというようなことだと思います。これを見せてもらったときに、非常に誇らしくもあり、嬉しくもありました。先ほどの何のためにということは、あらゆる分野で問い続けなくちゃいけないんだろうと思います。本当、宿題って何のためにやるんだろうという話から、また考えていきたいと思います。柳瀬さん、お待たせしました。

柳瀬委員：いろいろなテーマが出て、皆さんお話しているので、私、ちょっと立場をかえて、PTA会長をやっていました、田井小学校で。もう20年も前ですけれども。まず、よそ者だったんですね。筑波山麓へ引っ越して、最初、何とか地域にデビューしなきゃいけないというか、地域の人たちともコミュニケーションをしたいというので、PTAへ行って、そして誰かPTA会長をやる方いませんか。普通いないですよ。私、はい、やりますと言って手を挙げて、PTA会長になりました。実はちゃんと地域で順番があつて、私以外の方がほとんど決まっていたんですけれども、2度断わってから3回目に引き受けるということになっていたみたいで、私みたく手挙げて、やりますという人間があらわれることは想定していなかったもので、なりました。そん

様式第1号

なことがあって、大言壮語をして、学校が活性化するというのは地域が活性化することだと、地域が活性化して学校も活性化するんだからというので、本当、大それたことを言って、地域でどんどん協力していこうと、そういうこともして、ちょうど当時、先生方が地域の人材を発掘するというので、いろいろな形で、竹細工ができるとか、わら細工ができるなんて、そういう方たちをどんどん発掘して取り入れていこうということをしたんですね。私も地域で農園やっていたり、炭焼きをやっていたりしたので、先生たちと、じゃあ炭焼きでやりましょうとって田井小学校の炭焼きをつくっていったんですね。今はどうか分かりません。だけれども、地域の人材をというの、そういう動きもすごく強くて、本当、私、農作業の合間に長靴で学校へ行って、裏から職員室トントンとやって、あらゆることを、こうですね、こうですねとやっていたんですけれども、今そんなことやったら、多分、不審者ですぐ捕まりますから、だめだとは思いますが。地域も本当に教育の中身まで協力することはできるんです。先ほどのコミュニケーションが難しいというのは、田舎でも都会でも、別の事情でコミュニケーションすごく難しいんだと思うんです。PTAの会議開いても、はいなんて手挙げる人はいなくて、意見もなかなか出てこない、なのにPTAの会議が終わった後に、あっちだのこっちだのから、わあわあといろいろ話し合い始めるんですよね。これは何なんだと思って、だったらば、対面で会議のときに言えないんだったら、アンケートをとろうというので、頻繁にアンケートをとって意見を吸い上げました。アンケートをとっていくうちに、最初のころは、こうしてほしい、ああしてほしいというのは出てくるんだけど、何回かやっているうちに、じゃあ、自分は、私はこういうことができますというのが少しずつ出てくるんですね。これはしめたもんだというので、じゃあ、やりましょう、やりましょうとって、アンケートを盾にとりまして、保護者の中からPTA主催の行事をしたいという意見がありますとって大きく取り上げて、それで水探検を

しようということで、PTA主催の、先生たちにももちろん協力してもらいますが、筑波山麓の水を採検するというのをやったんですね。それが今も続いているので、学校はなくなりましたが。地域ぐるみというのは、やり方でいろいろできるし、それで嫁さんの田舎に来た人なんかは、そういう機会がないと地域デビューできないんですよ。だから、ほとんど地域デビューするためにそういうことやっていたみたいなのを、いろいろやりました。本当こちらの立場で何か言いたいなということもすごくあるんですけども、いろいろなことがあると思うんですが、さっき鈴木さんも言われていたけれども、付さんがおっしゃられた、軸がないと、鈴木さんもおっしゃられていたけれども、目標となるものがないということをおっしゃられていて、私は専門の立場からすると、やっぱり哲学がないと思うんですよ。いろいろなことを、何が正しいか何が正しくないかというのはわからないですけども、先生方が自分の哲学を持って教育に向き合ってほしいなと。そうしますと、大体、人間愛から、ちょっとバタくさいことを言いますけれども、人間愛から解決していこうという基本姿勢がなければ、どんなにいい方法をやったってうまくいかないし、どんなに成功したって、人間愛がなければ、子どもたちのことを本当に思う気持ちがなければ、どんな成功事例であっても意味がないんだと思うんですよ。そういう軸、それがあれば、いろいろ難しい問題に直面しても、じゃあ話し合いませんか、子どもたちのためにみんなで何かできる方法ないですかねとって話し合うことができると思うんですよ。何でその人間愛がなくなったかって、ないことはないんですけども、これはもう門脇教育長がよく言っている教育基本法が変わったんだとってよくおっしゃられるんですよ。みんな、はあとと思うと思うんですけども、ちょっと私なりの解釈をすると、前の教育基本法は「人類共通の人間愛に基づき」とって始まったんですよ。変わった教育基本法は、どういう文言になったかといったら、「地域を愛する心、国を愛する心」というふうに変わっ

ていったんですよね。つまり国を愛する心、地域を愛する心がどんどんつながって行って、世界の貧困の問題とか、隣の国の人たちのことまで考えられるようになるというのが前提だったんです、と思うんです。そういうつくりなんです。しかし、そこに新自由主義的な考え方、自己責任だよとか、競争して勝たなきゃだめなんだというのが入ってくるとちょっと変わってくるんですよ。この地域はよその地域より活性化していい地域にしたいんだというのは健全なんだけれども、よその地域のことはどうでもいいよとなったら、もう全然意味がない。だから、日本の教育、すごくいい教育にしたいよね、だけれども、隣の国に負けないような国にしたいんだというと、ちょっとまた話が違って来る。だから、郷土愛とか国を愛する心を養うということを今の教育基本法で言っているけれども、その延長線上に、市長が言っているような世界が見えるかということまで行かなきゃいけないと思っていて、私は、もうごろんともう一回ひっくり返して、人間愛があれば大方問題は解決するよねという前提に立ちたいな、なんて思っています。教育大綱のときに言おうと思ったんですけれども、まとめて言っちゃいました。

市長：ありがとうございます。非常に重要な部分だと思いますので、教育長、今のことも含めてどうぞ。

教育長：今、みんな、私もPTA会長やっていたとか言っていましたから、私も実は、並木中等学校の初代のPTA会長をやっていました。だからどうなんだということで。私があるポジションについては、私とそのポジションについてたときと、そのポジションをおりたときは、明らかにその機関なり、場所が変わっているというようなことを実際にやってきたつもりです。今、私がこのつくば市の教育長をやっていますから、だから就任した時点のつくば市の教育と私がやめるときのつくば市の教育を変えたいと私はよく思っているんですね。そういうようなことをやってきたのは、私も運命みたいなところだから。それで、余り長くならないように話をしますけれども、皆

さんに私が期待したのは、今の教育ができないことを、こんなことをやったらいいんじゃないかということをごんごんごんごんごん言ってもらいたかったんですよね。部分修正じゃなくて、抜本的に変えるにはこういうふうなことをしてほしいというような強い要求みたいな期待であるものが、ごんごん出てきてほしいなというふうに思っていたんですけども、きょうは残念ながら、そういうような方向での話をする機会がなく残念だなと思っています。私は、今の教育制度というのは、大体150年ぐらいから始まった制度で、近代公教育制度と言っていますが、学校を中心にしてやっているわけですけども、6歳になったら、必ず4月のある日に学校に行かなきゃだめだとか、学校へ行ったら、6歳の子は6歳の子だけでクラスをつくるとか、ということは、だから、お姉ちゃんと一緒に机を並べて勉強したいというような子がいたとしたら、それはだめというふうに言われますね。教員の免許証がなければ教育は教えるはだめだという、地域には相当学識のある人だとか、あるいは高度な能力を持っている人はいるけれども、そういう人も学校に行き教えることができないとか、私は、もっと言うと、14か15ぐらい、極めて不自然なことをやっているのが今の学校だとずっと言っています。だから、なぜ、その自然な形の教育ができないのか、私は、もっと具体的にイメージすると、寺子屋というのがありましたね。一般庶民の学校、学びの場、寺子屋というのは、子どもたちが学ぶ場所だというふうにも私は言っています。それに対して、学校というのは教えてもらう場、学ぶと教えるというのは相当違う言葉なんですよね。カナダには、学ぶ、learnに当たる言葉はあるけれども、teach、教えるという言葉そのものがないとカナダの文化人類学者がそういうふうに言っていますけれども、だから今や、教えてもらう場所から、自ら学ぶ場所というような方向で教育のあり方を変えていかなきゃだめじゃないかと。市長は、世界のあしたが見えるまちをつくるというふうに言っていますから、私はつくば市は世界のあしたの教育のトップランナーになるというふ

うにずっと言ってきています。世界のあしたの教育のトップランナーになるということは、今の教育ではない、日本だけじゃなくて、今の教育制度の中ではやっていないこと、できないようなことを、つくば市からできるようなことにしましょうよというような方向で、私は今も自分なりに考えているんですね。そういうような方向で、そういうようなことをベースにしながら、ぜひ皆さんには、どんどんどんどん、だったら、こういうことをやれるんじゃないの、こういうことをやってくださいよというような声を期待していたんですけれども、今、そういう方向での発言はなかったのでちょっと残念だななど。これからも、そういう方向で教育大綱は何とかまとめていきたいと思っていますので、いろいろな手段を使いながら、ネットでもいいし、手紙でもいいし、電話でもいいし、いろいろな提案というか、期待とか、希望みたいなものを出してもらえればもっとありがたいなと思っていますので、よろしくお願ひしたいと思います。

市長：ありがとうございます。ティーチングからラーニングに変わっていくというのは、世界中の教育が目指している方向性だと思います。おそらく今後、パーソナライズドラーニングがとても重要になってくるということも間違いないと思います。今までは、きっとむしろユニファイドティーチングのような全て統一してまとめて教えていたけれども、個別に学んでいくように変わっていくことをこれからやらなくてはいけない。学力や進捗状況だけでなく、学習環境も含めて、不登校の子にも不登校の子の学び方があるというようなことも含めて、我々も本当に根本から考えていかなくちゃいけないと思っています。時間はあっという間に過ぎるものですが、もう少しPTA会長さんたちからいろいろなお話を伺いんですが、今、聞いた中で自由なお話いただいて結構なんですけど、これから考えていく中で、私、世界のあしたが見えるまちというのを言っていますし、そのフロントランナーということを教育で目指しますが、そういうまちでPTAというのはどういう存在になる

様式第1号

のかなというのを、皆さんのお考えを伺いたいと思います。さっき、唯一、PTAの立場というので、保護者と学校の調整役というような言葉を鈴木さんが使ったと思いますが、長橋さんは学校側になんていうお話もありました。あるいは、この会議で以前、「先生って一体何なんだろう」、「先生という職業ってどんなんだろう」という話をしている中で、これもやっぱり比喻が出て、ファシリテーターであるとか、苗床などという表現がありました。我々がイメージをしていく中で、「PTAはどういう存在で何をするんだろう」というようなことを、会長さんたちがそれぞれでお仕事をされていると思います。別に正解なんか全くない話で、御自身はPTAって何だと思って今活動していて、今後のPTAってこういうものにしたいというような部分について、どなたからでもいいですけども、お願いします。

二宮副会長：私は、PTAの会長に就任した際には、もうずっと言っているのは、PTAとは、子どもたちが学校生活を送るために、よりよいプラスアルファの部分、このための活動だと常に総会とかでも話しています。やっぱりPTAという活動をしていることによって、例えばなくなったもの、行事をまた復活させてみたり、運動会ですけれども、ことしは親子競技というものを追加させていただいて、親と子、プラス先生との触れ合いをするための場をつくるというような活動をしています。というか、自分はそういうふうに思っているんですけども、周りの保護者の方がどう考えているのかというのは正直わかりません。ただ、自分はそういう信念でやっているということは間違いありません。

市長：そういう思いに対して、どうですか、周りの保護者の温度感というのはどんなふうには今感じてらっしゃいますか。

二宮副会長：やったことに対しては、やってよかったねとかという意見は聞きますけれども、何でそこまでやるのかなとかというのは、うちの地区ではないですね。

様式第1号

市長：二宮さんは、何でそういう考えに思い至ったんですか。

二宮副会長：実際、PTA役員やる前は、もう実際のところ、真面目な話、もうそこまで興味はなかったんです。学校の教師とのかかわり合いは正直なかったんですけれども、PTAをやっていくことに対して、学校の先生との距離が近くなる、子どもたちとの距離が近くなる、じゃあ子どもたちがどうすれば学校生活をよくするためになるかというふうに考えられるようになったということですかね。

市長：やっぱり入っていく中で、どんどんどんどん考えも深まっていったり、広がっていったりするということがあるんですかね。

二宮副会長：そうですね。あとは、教師の立場になって考えてみて、今、体罰とかで結構あると思うんですけれども、その体罰の定義がないじゃないですか、どこからどこまでが体罰で、これは体罰じゃないという、例えば首根っこつかまえた、これで体罰になるのか、ならないのかというのも実際あると思うので、逆に、先生たちはかわいそうだなというふうに思います。何をしても体罰になっちゃったら、何もできないし、言葉で叱咤しても、それが言葉の暴力になってしまう、それで子どもがちゃんと成長できるのかというふうにもやっぱり考えるようになりますね。

市長：ありがとうございます。そうですね。暴力を振るう子を抑止することまで体罰、例えば抑えるとか、そういうことまで体罰になるのであれば、先生方は身動きとれなくなっちゃうなと思いますので、そこは明確にやはり線は引かなくちゃいけないと思っています。多分、初動を間違っ、そういうふうには暴力を振るう子を、例えば体を張ってとめたことを体罰と言う子どもがいるのであれば、それは体罰ではないとはっきり先生も校長先生も言わなくちゃいけないんだとは思っています。ありがとうございます。ほかの方、どなたでも。PTAとは何か。

長橋副会長：もう既に学校のためと言ってしまったんですが、先ほど二宮さん

から子どものためとおっしゃったんですが、私は保護者のためだと思っています。保護者同士のつながりを深めるとか、保護者と学校、二宮さんおっしゃっていたんですが、保護者と学校をつなぐを良くするという場だと僕は思っています。ただ、学校寄りと言ったのは、今鹿島小学校は小さな学校で、先生の数も足りていません。先ほど、100人ちょっとから180人に増えたと言ったんですが、先生の数は変わっていないんですよね。そうすると、やっぱりそれだけの児童の面倒を見るということが先生だけでは難しくなっているんで、これはもうPTAがしっかり出ていって助けなきゃいけないという非常に強い思いを持っています。校長先生とお話しすると、加配は一生懸命お願いしているんだということではあるんですが、実際つくば市では教師が足りていないことで、自分がもう直接頭を下げて、先生を引き受けていただいているような現状だということ、なかなか加配ができないということも伺っています。やっぱり先生が足りないのは非常に問題なので、その先生をふやすことができないのかなという思いはあります。PTAとちょっと違うんですが、先ほど市長がおっしゃったように、成績表は何であるというお話があったんですが、僕はずっとやっぱりそう思っていました。子どもの成績表を見ると、いいことしか書いていないんですよ。結構悪い子なはずなんです、男の子なので、結構悪さというか、もう言うこと聞かないとかってあると思うんですけども、そういうこと一切書いていない。うちの妻に、それを見ながら、「何で悪いこと書いていないんだろう」と、「先生書けないよ、そんなこと」、「じゃあ意味ないじゃん、これ」と僕は思っています。なら、その書く時間を使って面談をもっとやったほうが、よりよいコミュニケーションができるんだと思うんですけども、何かあの紙に余り僕は興味持たなくて、自分が子どものときはものすごく待ち遠しい通知表だったんですけども、子どもが持ってくる通知表がもう全然興味を持たなくて、本当に何でこんなのあるんだろうという思いではあります。済みません、も

様式第1号

う一つ言いたいことがあって、もう一回、PTAの話に戻るんですが、私の学校で、給食の時間、音楽流して、それで先生の言うことが聞こえないということちょっとトラブルがありました。子どもと保護者と先生の間でトラブルがあって、ちょっと保護者が詰め寄るところがあったので割って入ったんですけれども、校長先生、教頭先生は、給食は静かにしなきゃいかんということ押しつけるようなことを保護者に言うと。保護者のほうは、子どもの考えをしっかりと聞いてあげてよというふうに、どっちも、全然もう平行線なんですよね。助け船を出して、「校長先生、もっと子どもの言うこと聞きましょう」と言って、保護者の方には、「給食というのは、給食も教育の一環ですよ」と。「給食も、単に静かに食べなさい、落ちついて食べなさいだけじゃなくて、楽しく食べなさいということも書いてあるはずなんです」ということを校長先生に伝えてということ割って入って、それは解決したような気がするんですが、そういうことを少しずつやっていると溝は埋まっていけないのかなという気はしています。そういう役目でもあるのかなというふうに僕は思っています。

市長：ありがとうございます。通知表について、今、先生方は大変なエネルギーと時間を使って書いているものが、現実として親が関心持たないという。本当にこの現実を我々は受けとめなくてはならないと思います。おっしゃるとおりで、私も正直、それが何点でもよくて、通知表もらうと子どもに「君はこの評価について自分ではどう思っているの」と聞くんですけれども、ちょっと先生方に申しわけないんですけれどもそういうツールでしかない。昔はもうちょっと書いていたと思うんですが、今、いろいろなルールがあって書きにくくなっているようなところもあるようなんですよね。

長橋副会長：昔はもうちゃんと点数化されていて、この国語5とか、算数が3とかあったんですけれども、もう今はわからない成績表になっていますよね。わざとそうしているんだと思うんですけれども、余計に意味がなくなってい

様式第1号

るんじゃないかと感じています。

市長：このあたりは、今後、ある意味テーマとなり得るかもしれないというふうには思っています。ほかにいかがですか。

森田副会長：僕自身は、PTA、この活動に入ってからいろいろ考えるようになりましてけれども、PTAというのは子どものためにする活動だろうというふうには思っています。ただ、往々にして親の中にも子どもの教育のことを考えない、自分たちのことだけ考えてしまうであるとか、学校側からすれば、いろいろなしがらみの中で学校側の意見ばかりになってしまう部分もあるので、子どもたちのために何ができるだろうということを常々習慣として考えるようにという話はさせてもらっています。そのときに、やっぱり保護者がどういうふう子どもにかかわっていくのかということ自分たちで考えるという機会はずくなくはないし、場合によっては、さっき言ったように、保護者として考えた結果、学校長にクレームを入れる、クレームと言っちゃあれですけども、意見するといった取り組みが、本当に子どもたちのためになるかということ、さっき言ったとおり、1対多の関係でどっちが優先されるかという話になっちゃうので、子どもたちのために意見をまとめるのもPTAの役目だろうし、そういうところでやるべき組織だなというふうに僕は今まで思っていたが、今日いろいろ話しながら、もうちょっと広いところできるのかなということは今考えつつあるので、また今後考えていきたいなど。特に地域ぐるみでということに関しては、非常に、僕は春日なんですけれども、春日とか学園の森というのは非常に難しい課題を抱えているなと思っていて、昔からの地域というものがなくて、お祭りがなくてであるとか、子ども会がない、区会がないと、連携する相手がないというところで、今、春日学園って、非常にそういうところでは学校と保護者という関係でしかやってこられていないので、PTAとして、PTA単独でできるかわからないですけども、まだまだやるべきことがあるなど

様式第1号

いうふうに今感じています。これは、ちょっと地域間の問題というのも今あって、3番の問題というのは、今後、僕は考えるべき問題だなというふうには思っています。

市長：ありがとうございます。新しいところというのは、いろいろなものの土壌が違う中で難しさもあると思うんですが、逆にできるとモデルになっていくとも思いますので、いろいろまたシェアしていただきたいと思います。

付副会長：まず、PTAとは何かという話になってくると、私も2回目のPTA会長ですが、非常に疑問に思っているし、会議をやっている、お金の使い方が一番メインで百何十万円の話なんですね。長男の私立学校なんて、生徒会が取り扱っているお金がもう1,000万円を超えているというような感じで、子どもたちが取り扱っているお金は、私たちの10倍近くあるんだけど、何でこの大人たちが一生懸命集まって議論しているんだろう。一昨年、小学校のPTA会長をやっていたときに、校長先生から一生懸命訴えられて、タブレットがないと本当に授業がばらつきがあり過ぎて、このページにしてくださいと言っても、ついてこられない子がたくさんいるから、だから、あったらいいなということで、たまたまPTAの経常費が60万ぐらい余ったから、先生たちと一緒に、ヤフオクでかな、タブレットとかいろいろ探して格安で購入したりとか、そういうふうに学校の教育を支えたことは事実だなと思います。今回みたいにちょっとトラブルがあったら、個人の親が学校に相談すると、やっぱり申し上げ方が間違っちゃうとなかなか対応してもらえないところがあれば、みんなで集まって知恵を絞って、組織を通して、あるいは、何人か一緒に学校に行くと、よりよい解決方法が見出せるのかなというのがPTAの役割の一つではないでしょうかと思います。あと、教育から学びへという話なんですけれども、私は子ども3人いるんですけれども、じゃあ、学校に行けというのは、私もずっと学校に行ったので、学校って何なんだろうと常に子どもたちと一緒に話し合います。特に長男が高校に行くとき、

様式第1号

パパ、ママ、何で高校に行くんですかと、私もそんなこと聞かれたことないから、最終的に子どもに言えたのが、高校に行くと、もっと学ぶ内容が、学びたくない内容もパッケージで来るんですけれども、将来への道がもうちょっといろいろな道が開かれるんじゃないかなと、要は、いろいろなところに行ける扉が多くなるんじゃないかなという話はしたんですね。それと一緒に、学校とはどういう場所なのかと私が子どもたちとよく話し合ったのが、人生の中でいろいろなところに行くんですけれども、例えばスポーツをしたり、外食したり、その中の一つが、選択肢として学校があるということで、それは何のサービスを受けられるかという、自分の力をつける場所だなど、学力であったり、人と一緒にいることによって協力関係、コミュニケーション力と、いろいろな力をつけることによって、社会に出たときにその力を発揮して人の役に立ったり、自分の人生は楽しくなったり、体力、部活でまさに体力つけたりとか、そういう場所だよというふうに話をしています。なので、自分で学校の宿題がないから、きょう何もしませんということじゃなくて、じゃあ、学校は生活の一部であって、学校は生活の全部ではなくて、常に本を読んだり、映画を見たり、人と遊んだり、ゲームしたり、ゲームの攻略法がわからなかったら動画を見たりとか、そういうことを全部あることによって、自分の人生が一日一日充実したり、幸福感を感じるようになるんですね。あと、英語教育に関して、みんな一生懸命英語を勉強するんですけれども、私は何となく、いろいろな国の人としゃべっていくうちにできるようになったんですけれども、実際スペリングできなくて書けない状況なんですね。みんなに聞かれるんですけれども、どうやって英語を学ぶかということで聞かれるんですけれども、私は人について好奇心があるから、ツールとして英語は使っていてというふうに答えているんですね。今の高校とか、いろいろな人にも、英語はどうしたら会話力できるかという、映画も見ないで、美術館にも行かないで、スポーツもやらないで、家でじっとしていたら、英語を勉

様式第1号

強した人と会話できると思ったら間違いですよという話はしたりしますね。つまり何かというと、会話の内容があったり、何で会話するかというそもそものところから始まるんですね。なので、英語教育に関しても、学校教育に関しても、何の目的があるか、例えば字を何で学ぶかということ、本を読むため、本は何のために読むのかというふうに問い続けていくと、何のためか見えてくるんじゃないのかなと思います。

市長：ありがとうございます。根本さん、お願いします。

根本会長：まず、こういった機会において、教育長からありましたように、最初に多分、私がどんな形で話すかによって皆さんの言い方が変わったので、発案の仕方が失敗したことによって忌憚な意見がちょっと欠けてしまったのかなというのは、おわびも含めて。

市長：そんなことはないと思います。

根本会長：その中で、最初にいただきましたPTAとはというところですが、本当出合いの場ということで私は感じました。これは、子どもたちに対しても、先生に対しても、今までとは景色が違ったり、私はどちらかということ仕事を中心だったので、やっぱり大体家庭は奥様に任せてというところで、学校に入ったことによって、子どもたちの会話がふえたり、見えない景色が見えたり、あとは父兄の会話がふえたことによって、さまざまな情報が得られましたので、やはりPTAというのはすごい大事だなと。ただ、コミュニケーションに関しては、これは大事なので、これからも続けていきたいなということです。私たちの中で一つ、地域とともにしている一つで、父兄とサポートをしましょうというのが一つありまして、これだけ御案内をさせていただきます。というのは、基本的にはPTAとは違いまして、おやじの会みたいなものなんですけど、これは本当に、地域の中で皆さん職業があることによって、例えば駐車場だったりとか、そういったことを専門の職の人たち、いろいろなことで地域を盛り上げながら学校もやったりしたことで成功があ

ったということがありますので、これが本当にPTAからのつながりだったなと思いました。最後に、三つだけお話ということでお聞きしたいんですが、前回、今までの話の中にもありますトラブルがあったりとか、先生方が本当に抱えてきたときに、スクールロイヤーがいるとですね。つくば市の中で、デリケートな問題に関して、やはり抱え切れていない場合には、つくば市で相談窓口をつくるというお話があったので、今後そういった窓口をつくっていただけるのか、ある程度、進展したら、情報を、窓口をいただければなというところが一つです。

市長：はい。もうできています。

根本会長：最後にもう二つありまして、もう一つ、近年でもそうですが、いじめだったりとか学校の問題があったときに、どちらかという、責め立てるよりも、原因が発覚したときに逆に称賛できるように、よく発覚したなみたいな形の考え方の捉え方をしていただければ、学校としてもやっぱり隠してしまったりとか、臭いものはふたをしてしまうことがあるので、それはちょっと考え方を考えていただければなというのが一つ。最後に、平等、公正ということで、例えば今ですと中学校、お話もあったように、学力の問題が、中心市街だったりとか、あとはタブレットの問題だったりとかということで、平等と公正というところで、その辺を含めて今後も考えていただくのとともに、情報をいただければなというのが、この三つのお願いというか、指摘ですね。

市長：ありがとうございます。スクールロイヤーについては、もう市の政策の顧問の弁護士にお願いして、既に学校の先生から御相談いただいています。PTAも相談してだめなことはないですよ。ぜひPTAでも難しい案件等あれば、これは教育指導課に御相談いただければと思うので、朝賀課長がいますので、何かあれば御遠慮なくお話をいただければと思います。

私も就任以来、これは教育局に限らずですけども、とにかく隠さず第一報を入れてくれと言いつけて、最近は本当はかなり早く入るようになってきま

した。今までの教育局というのは、教育長や局長になる前の教育局というのは、やっぱり余りコミュニケーションがとりやすい教育局ではなかったのも、多分、学校の先生方というのは、まだその習慣というのがないと思うんですね。だから、今、本当に局長を中心に現場に近い教育局を目指していますし、現場から何かあったらすぐ相談に乗れるような体制にはしたいと思っていますので、そういうのはすごく大事な部分だと思いますので、今後もより徹底をしていきたいと思っています。格差はあってはいけませんので、きちんと今後はやっていきたいと思っています。もっといろいろお伺いしたいんですが、ちょっと時間が過ぎましたので、まず、おわびをしないといけないのは、文言がまだまだ整理されていなくて、時間がない中で何とか1回たたき台を作ろうということで頑張って書いてくれたものではありますので、そこはちょっと御理解をいただければと思います。今日の議論も含めて幾つかの要素をつけ足していかななくてはいけないと思っています。私が端的に感じているのは、学校というのはどういう場か、先生はどのような存在なのかといったところに、先生も失敗する、学校も失敗する場所ということも含めて、もうはっきり書き込んでいく方がいいのかと思います。また、自分をもっと知るということについて、小林りんさんやイエナプラン学校などあらゆる場所で言われたのは、自分自身とはどういう存在なんだろうかということを探求する機会というのが今の学校になかなかないので、何が自分の強みなのか、何が好きなのか、何が得意なのか、何が苦手なのかということをいろいろな角度から立体的に自分自身というのを浮かび上がらせていく必要があるのではないかと考えています。そうでないと自己肯定感も何も生まれてこないのではないかと考えていますので、そういうようなことなどは根本的に変えていかなくちゃいけないかと考えていますので、そういうことも踏まえて、やっぱり科学に基づいたアプローチを我々はしていく必要があると思っています。ここにも書いてありましたが、書ける漢字を20回も30

様式第1号

回も書かせても、多分それは脳科学的に全く意味がない行為ですので、そのあたりも、科学都市として考えなくちゃいけないなどの要素を幾つかまた踏まえて、大幅に変更をこれからもしていくと思いますので、そういった際にはまたお願いをできればと思っています。今日の議論の中で非常に強く感じたのは、やはり本質は何かというのをもう一度考えようということが皆さん共通していて、部活とは何か、宿題とは何か、通知表とは何か、学校とは何かということ、やっぱりもっと突き詰めて、いろいろな形でいろいろな人たちと議論する中で作っていくというプロセスが必要だと改めて感じましたので、ぜひ、これからもよろしくお願ひします。どうしても何か一言というのがあれば。よろしいですか。今日は本当にお忙しい中、ありがとうございました。もっと言いたいことあったと思うんですけども、ぜひ今後の機会によろしくお願ひします。どうもありがとうございました。

事務局：ありがとうございました。次回の総合教育会議は7月を予定しております。詳細は改めて御案内いたします。本日はありがとうございました。

以上

令和元年度(2019年度)第1回つくば市総合教育会議次第

日時：令和元年(2019年)5月20日(月)

15時30分から17時15分まで

場所：庁議室

1 開会

2 市長挨拶

3 内容

教育大綱策定に向けたPTA代表者との意見交換

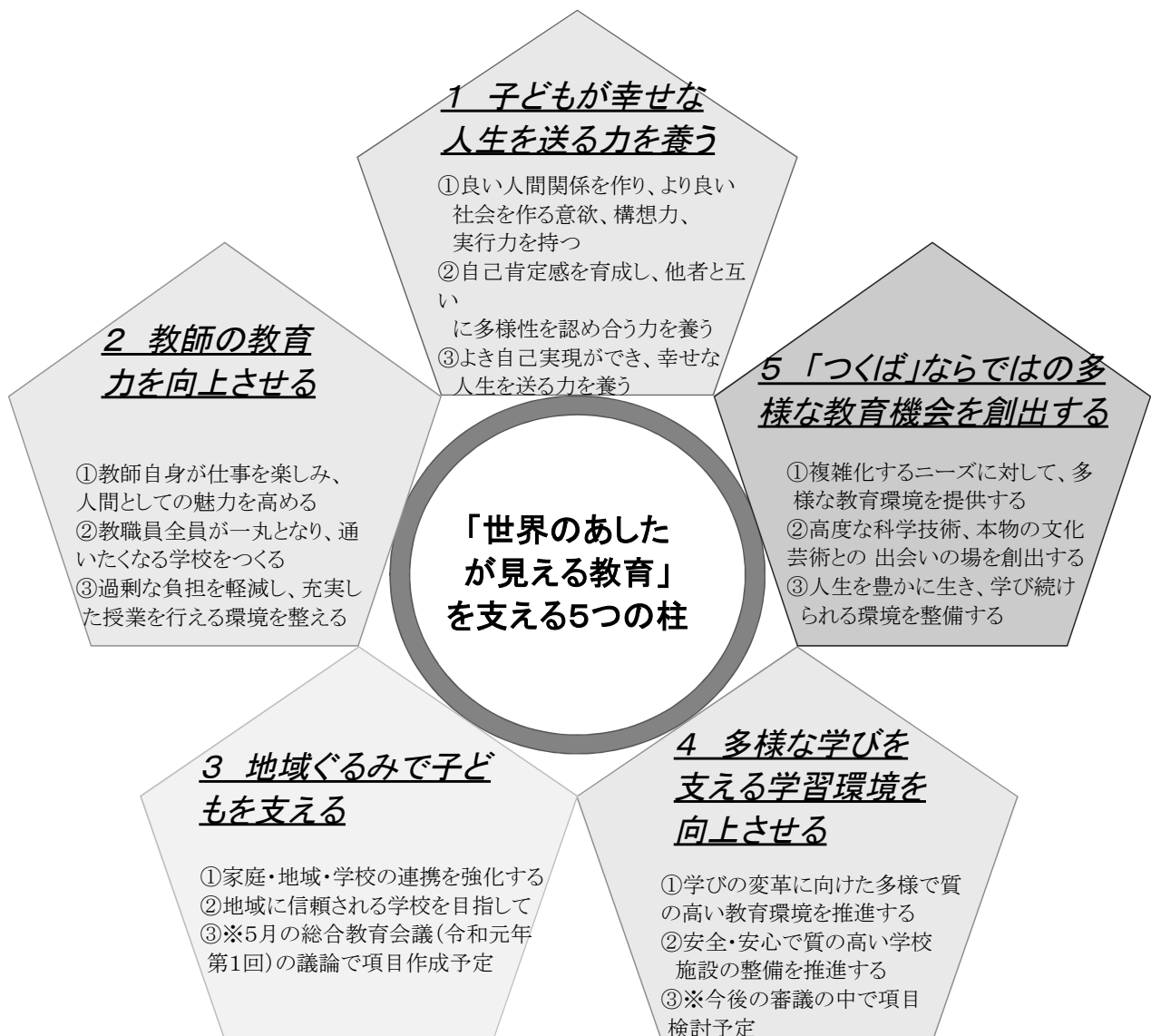
4 閉会

事務局：総務部総務課

：教育局教育総務課

つくば市教育大綱イメージ

これまでの総合教育会議で発言・議論のあったキーワードを類型化し、5つの柱で表現しています。



つくば市教育大綱骨子案

対象期間

令和2年度(2020年度)から令和〇年度(20〇〇年度)まで

◇基本理念

～世界のあしたをつくる人間を目指して～

○自ら周りに働きかけ、変革を起こしていける人間

○誰とでも良い関係を作ることができる人間

○より良い社会を考え作ろうとする意欲、実行力がある人間

めまぐるしく変化する社会の中で、一人一人が自分に合った幸せな人生を送れるように、次に掲げる5つの柱を中心に「つくば」ならではの教育を進めていきます。

◇「世界のあしたが見える教育」を支える5つの柱

1 子どもが幸せな人生を送る力を養う

①良い人間関係を作り、より良い社会を作る意欲、構想力、実行力を持つ

よりよい社会とは何か、自分や周りの社会に興味を持ち、人々が少しでも幸せになれるように知恵を絞り、周りを巻き込みながら実現に向けて行動します。

②自己肯定感を育成し、他者と互いに多様性を認め合う力を養う

周りから自分らしさを認められると同時に、他者の多様な価値観も認め、共に支え合う態度を育みます。

③よき自己実現ができ、幸せな人生を送る力を養う

自分と向き合う時間、将来の姿を思い描く機会を創出し、充実した学校生活を送

れるよう支援します。

2 教師の教育力を向上させる

①教師自身が仕事を楽しみ、人間としての魅力を高める

教職員が誇りや情熱、やりがいをもって仕事に打ち込み、生き生きと働くことで、子どもに背中ではぐける魅力的な教職員を増やします。

②教職員全員が一丸となり、通いたくなる学校をつくる

子ども一人一人が楽しく、幸せで充実した学校生活を送るため、教職員の指導力向上、学校全体としての組織力の向上を目指します。

③教職員の過剰な負担を軽減し、充実した授業を行える環境を整える

業務の整理・分担やシステム等の導入による効率化により教職員の事務的負担を軽減させるとともに、現場の教師や学校長に裁量権を持たせ、教師の本業である授業に集中できる学校環境や、教員が自ら学び続けられる制度の整備を進めます。

3 地域ぐるみで子どもを支える

①家庭・地域・学校の連携を強化する

子どもの成長に向けた共通目標に向かって、家庭・地域・学校が各々で行うべき役割を理解し、連携・協働していきます。

②地域に信頼される学校を目指して

地域に信頼される学校運営・教育運営を目指し、行政や学校から地域への情報発信や情報共有を密に図ります。

③※5月の総合教育会議（令和元年第1回）の議論で項目作成予定

4 多様な学びを支える学習環境を向上させる

①学びの変革に向けた多様で質の高い教育環境を推進する

学校の規模や学習方法など、学校ごとに特徴を持たせていくことで、多様な学び方を選択できる教育環境を創出していきます。

②安全・安心で質の高い学校施設の整備を推進する

老朽化した学校施設の改修・長寿命化を進めると共に、グローバル化や技術革新が進んだ新時代に対応できる教育のための環境づくりを推進します。

③※今後の審議の中で項目検討予定

5 「つくば」ならではの多様な教育機会を創出する

①複雑化するニーズに対して、多様な教育環境を提供する

誰一人取り残さないSDGsの考え方のもと、家庭の貧富の差や障害の有無、公立・私立の違いや個人の学習進捗の違い等に関係なく、既成の枠組みにとらわれない教育環境の整備を進めていきます。

②高度な科学技術、本物の文化芸術との出会いの場を創出する

市内で行われている最先端の研究や、国内外の文化芸術作品に生で触れることで、豊かな感性や創造性を育みます。

③人生を豊かに生き、学び続けられる環境を整備する

地域において、「誰でも」「学びたいときに」「いつからでも」学べるように、生涯にわたり学び続けることができる環境づくりを推進します。

教育大綱策定に向けたスケジュール(案)

令和2年(2020年)3月公表スケジュール

作業項目	令和元年(2019年)															
	5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月	
総合教育会議	★ 第1回(本日) 教育大綱策定に向けた PTA代表者との意見交換				↔ 第2回 【予定】 有識者講演		↔ 第3回 骨子案審議		↔ 第4回 大綱素案審議		↔ 大綱素案調整期間					
大綱策定	↔ 大綱素案の検討										11/27 ● 【パブコメ】 素案決定		↔ パブコメ (12/9~1/6)			

作業項目	令和2年(2020年)					
	1月		2月		3月	
総合教育会議	↔ 第5回 パブコメ結果報告 改正案審議		↔ 最終案報告			
大綱策定	↔ パブコメ 結果集計		↔ パブコメ 改正案検討		○ 公表	
	◇ 必要の都度 改正案を議論		○ 最終決定			